

日本語における「VP+の」の意味指示と VP 構造との関係

黄 毅燕

要 約

日本語における「VP+の」の意味指示は二つのタイプに分けられる。一つは VP その事態自身を指示する（自者指示）のに対して、もう一つは VP に関連するモノ/ヒトを指示する（他者指示）。本稿は「VP+の」が目的語を構成する場合、「VP+の」の自者指示・他者指示と VP の構造（V の性質、V の必須項、V のアスペクトを含め）との関係を対象として考察を試みた。

本 文

1. 問題提起

日本語における「VP+の」は名詞成分として意味指示は二つのタイプに分けられる。一つは、(1a)のように「佐吉が来たの」が「佐吉が来たこと」を意味し、つまり、VP その事態自身を指示する。一つは、(1b)のように「出来上がったの」が「出来上がったもの」を意味し、つまり、VP に関連するモノ・ヒトを指示する。

(1) a. 夕方、私は佐吉が来たのを見ると、急にはしゃぎ出した。(「幼年代」青空) (自者指示)

b. 出来上がったのを見ると、ずいぶん色々の文章や歌があった。(「小さな出来事」青空) (他者指示)

黄毅燕(2005、2007)では(1a)のような、VP が名詞化された後の名詞成分が VP その事態自身を指すことを自者指示と言う。(1b)のような、VP が名詞化された後の名詞成分が VP に関連するモノ・ヒトを指すことを他者指示と言う。準体助詞の「の」は文法機能が名詞化、意味機能が他者指示・自者指示であり、日本語における自者指示・他者指示のマーカの一つであると指摘した。

興味深いのは、同じ「VP+の」構造であるが、どのような統語条件で自者指示を表すか、どのような統語条件で他者指示を表すか。今までの観察では、「VP+の」の意味指示はいくつかの要素に左右されている。「VP+の」の後続する述語成分にも、VP の内部構造にも関係がある。黄毅燕(2009)は「VP+の」が目的語を構成する場合、「VP+の」の意味指示と後続する動詞の性質との関係を考察した。結論は次通りである。後続する動詞は[+主体動作] [-客体変化] [+認知活動] [+遂行性]の意味特徴を示す場合、「VP+の」は自者指示だけを表す。後続する動詞は[+主体動作] [+客体変化] [-認知活動] [-遂行性]の意味特徴を示す場合、「VP+の」は他者指示だけを表す。後続する動詞は[+主体動作] [-客体変化] [+認知活動] [-遂行性]の意味特徴を示す場合、「VP+の」は自者指示をも他者指示をも両方表す可能性がある。その場合の「VP+の」の意味指示を明らかにするには VP の内部構造を考察する必要があると思われる。

本稿は黄毅燕(2009)に踏まえて、後続する動詞が[+主体動作] [-客体変化] [+認知活動] [-遂行性]の意味特徴を示す場合、「VP+の」の意味指示と VP の内部構造との関係を究明するための研究である。今まで収集した実例から確認すれば、「VP+の」+を+見る」の用例が一番多いので、本稿の実例分析は「VP+の」の後続する動詞が「見る」である場合に限定される。

2. VP 構造と「VP+の」の意味指示との関係

全体から見れば、「VP+の」の意味指示に影響する要素は V の性質、V の必須項または V のアスペクト三つあると思われる。考察の方法としては、まず V の性質に着目する。V の性質がどの程度で「VP+の」の意味指示を決めるかを明らかにしてから、また V の必須項の生起の影響を考察する。V の性質と V の必須項の生起を分析しても「VP+の」の意味指示がまだ解明できない場合、V のアスペクトの考察に入る。

2.1 V の性質から「VP+の」の意味指示への影響

さて、動詞の全体の分類を説明しておこう。まず、動詞は目的語がつけられるかどうかによって他動詞と自動詞に分類される。影山(1993:46-48)の説に従って、自動詞は主語の構成成分の違いによってさらに非対格と非能格動詞に分けられる。非対格動詞の主語は動詞の内項からなっていて、動作が関連する無意識の対象である。非能格動詞の主語は動詞の外項からなっていて、動作主体である。また、影山(1993:54)の説を参考して、「たくさん」と言う副詞の修飾関係によって非能格動詞と非対格動詞を判別する。(2)が示すように、「たくさん」と共起する場合、「たくさん」が主語の数量を述べるほうは非対格動詞である。動作の量を述べるほうは非能格動詞である。

(2) a. 非対格動詞

たくさん産まれた=産まれた子供がたくさん

b. 非能格動詞

たくさん遊んだ=遊んだ量がたくさん、≠遊んだ人がたくさん (以上:影山 1993:54)

他動詞の再分類は工藤(1995:69)の説に参考する。

工藤(1995:69)は「スルーシテイル」の対立の有無によって、動詞を「外的運動動詞」「内的静態動詞」「静態動詞」に分けている。「外的運動動詞」は「食べる、読む」のように「スルーシテイル」の対立が目立っていて、「内的静態動詞」は「思う、考える」のようなものでやや複雑であり、「スルーシテイル」の対立があるが、人称制限にも関わる。「静態動詞」は「ある、聳える」のように「スルーシテイル」の対立がない。その分類に踏まえ、他動詞は「外的運動他動詞」、「内的静態他動詞」、「静態他動詞」に分けられる。

また、動詞Vの性質から「VP+の」の意味指示への影響によって、「VP+の」が2グループに分けられる。Aグループ、動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」の意味指示が解明できる。Bグループ、動詞Vの性質を確認するだけで「VP+の」の意味指示が解明できない。Aグループの動詞をV_A、Bグループの動詞をV_Bと表示する。次はV_AとV_Bの性質の区別を見てみよう。

2.1 Aグループ 動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」の意味指示が解明できる

理論上、Aグループはさらに「動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」が自者指示を表すことが分かる」と「動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」が他者指示を表すことがわかる」に細かく分けられるが、実際の調査には「動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」が他者指示を表すことがわかる」の実例が見つからない。そのゆえ、このAグループは「動詞Vの性質を確認すれば「VP+の」が自者指示を表すことが分かる」ということになっている。

Aグループの動詞V_Aの実例は「思う、心配する、意味する、行く、笑う、泣く」などが見られる。V_{A1}は3種類からなっている。V_{A1}は(3)が示すような主体感覚、感情など心理活動を表す動詞であり、つまり、上述した「内的情態他動詞」である。V_{A2}は(4)が示すような主体の状態や属性を表す動詞であり、つまり上述した静態他動詞である。V_{A3}は(5)が示すような非能格動詞である。

(3) V_{A1} 「内的情態他動詞」

その時、あの母さんが私の心配しているのを見
るに見かねて、日ごろだいじにしていた金をそ
こへ取り出した。(「分配」青空)(自者視指示)

(4) V_{A2} 「静態他動詞」

まもなく相手が買収の意向を示したのを見て具
体的な契約の準備を始めました。(内省)(自者指示)

(5) V_{A3} 「非能格動詞」

……あんなに笑ったのを見たことが無いと、同
席の藁塚産業課長が云っておったがね。(「爆弾
太平記」青空)(自者指示)

Aグループの「VP+の」はV_Aの必須項の生起情況やアスペクトの状況に問わず自者指示を表す。

2.1.2 Bグループ 動詞Vの性質を確認するだけで「VP+の」の意味指示が解明できない

Bグループの実例は数多く見られる。(6a)と(6b)の下線部における動詞は同じ「近づくと」であるが、(6a)は「私が近づいた」その事態自身を指すが、(6b)は「近づいた人」を指す。

(6) a. 妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んできましたが……(略)。(「溺れかけた兄妹」青空)
(自者指示)

b. 騎兵は——近づいたのを確認すれば曹長だった。(「將軍」青空)(他者指示)

V_Bは2種類からなっている。V_{B1}は「調べる、食う、配当する、買う、貰う」などの外的運動他動詞であり、V_{B2}は「出来上がる、現れる、捕まれる、出る、壊れる、そびえる」などの非対格動詞である。Bグループの「VP+の」の意味指示はV_Bの必須項の生起やV_Bのアスペクトによって変化する。

2.2 Bグループの「VP+の」におけるV_Bの必須項の生起から「VP+の」の意味指示への影響

上述したようにV_BはV_{B1}「外的運動他動詞」とV_{B2}「非対格動詞」が2種類ある。項構造から見れば、V_{B1}「外的運動他動詞」は動作主と対象を取り、動作主が外項であり主語に立ち、対象が内項であり目的語に立つ。V_{B2}「非対格動詞」は対象しか取らなく、対象が内項であり主語に立つ。影山(1993:47)には他動詞、非対格動詞と非能格動詞の項構造は(7)の図で表示されている。

(7) Agent:動作主; Theme:対象; <>の中:内項; <>の外:外項。

a. 他動詞 : (Agent <Theme>)

b. 非能格動詞 : (Agent < >)

c. 非対格動詞 : (<Theme>)

(影山 1993:47)

(7)を参照してV_{B1}とV_{B2}が(8)で表示できると思われる。

(8) a. V_{B1} 「外的運動動詞」 : (Agent <Theme>)

b. V_{B2} 「非対格動詞」 : (<Theme>)

考察によれば、Bグループの「VP+の」において、「VP+の」の意味指示に影響する項は内項だけであることが明らかになる。内項が生起すれば、外項が生起するか否かに問わず自者指示を表す。言い換えると、外項が生起するか否かは「VP+の」の多義性を導かない。が、(9)が示すように内項が生起するか否かは「VP+の」が自者指示を表すか、他者指示を表すかに影響を与えている。

(9) a. 両親がおいしそうに手作りラーメンを食べて
いるのを見て、ちょっと親孝行が出来たか
なという気がした。(自者指示)

b. 子供が食べているのを見ると、腐った林檎だった。(他者指示)(以上:内省)

そのゆえ、上述したV_Bの必須項の考察というのは実際にV_Bの内項が生起しているかどうかを確認する仕事になっている。

2.2.1 V_Bの内項が生起する場合「VP+の」が自者指示を表す

(10)が示すように内項が生起する場合、「VP+の」が自者指示を表す。

(10) 女は相手が倒れたのを見て恐ろしさのあまりピストルを投げ捨てて葛飾の部屋へ走り込む。(「メデューサの首」青空) (自者指示)

(10)のV「倒れる」は非対格動詞であり、内項の「相手」が生起している、「相手が倒れたの」は「相手が倒れた」その事態自身を意味する。

2.2.2 V_Bの内項が生起していない場合「VP+の」が自者指示をも他者指示をも表す可能性を兼ねる

V_Bの内項が生起していない場合、「VP+の」が自者指示を表すこともあり、他者指示を表すこともある。次は他者指示を表す制限と自者指示を表す条件を検討してみよう。

2.2.2.1 V_Bの内項が生起していない「VP+の」が他者指示を表す場合

V_Bの内項が生起していない場合だけで「VP+の」が他者指示を表すことが可能になっている。指示対象は生起していない内項と一致している。

(11) 行司の神戸は紙に書いたのを見て両方に別れて叩へて居る剣士の姓名を呼び揚げる。(「撃剣興行」青空) (内項を指示する)

(11)の「書く」は外的運動他動詞であり、外項も内項も生起していないが、「紙に書いたの」は外項の「ヒト」を意味してではなく、内項の「紙に書いたもの」を意味している。

2.2.2.2 V_Bの内項が生起していない「VP+の」が自者指示を表す可能性もある

2.2.1および2.2.2.1の分析したように、Bグループの「VP+の」において、V_Bの内項が生起すれば「VP+の」が自者指示を表すのに対して、V_Bの内項が生起していない場合しか他者指示が表せない。また、他者指示の指示対象はV_Bの内項と一致している。だが、V_Bの内項が生起していない場合「VP+の」が必ずしも他者指示を表すとは言えない。(12)をご覧ください。

(12) ポチは大様だから、余処の犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒らない。黙って快く食わせて置く。が、他の食うのを見て自分も食気附く時がある。(「平凡」青空) (自者指示)

(12)の「食う」は外的運動他動詞であり、外項の「他」が生起しているが内項が生起していない。が、「他の食うの」は「モノ」を意味してではなく、「他の食う」その事態自身を意味している。その場合、「VP+の」の意味指示を解明するにはVのアスペクトの考察も必要となるとと思われる。

2.3 Bグループの「VP+の」におけるVのアスペクトから「VP+の」の意味指示への影響

紙幅の関係で、本稿は「スル」「シタ」「シテイル」「シテイタ」というアスペクトの四つの基本形式だ

け取り扱う。工藤(1995:96)ではこの四つの基本形式のアスペクトの基本意味と派生意味が述べられて表<1>で表示されている。

| 形式 \ 意味 | 基本意味 | 派生意味 | |
|---------|------|---------|-----|
| スル | 完成性 | / | 反復性 |
| シタ | 完成性 | パーフェクト性 | 反復性 |
| シテイル | 継続性 | パーフェクト性 | 反復性 |
| シテイタ | 継続性 | パーフェクト性 | 反復性 |

<表 1>(工藤 1995:96)

その中の「継続性」は「動作継続性」と「変化結果継続」に2種類分けられる(工藤 1995:88)。「パーフェクト性」とは「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていること」である(工藤 1995:99)。が、「動作継続性」とは「運動が終了限界に到達する前の過程段階」である(工藤 1995:81)。「結果継続性」とは「終了限界に到達した後の結果段階」である(工藤 1995:81)。というのは、実際には「動作継続性」は「パーフェクト性」の派生意味を持っていない。それに対して、「結果継続性」は「パーフェクト性」の派生意味を持っていると考えられる。そのゆえに、表<1>は表<2>に調整できるとと思われる。

| 形式 \ 意味 | 基本意味 | | 派生意味 | |
|---------|------|---------|---------|-----|
| | スル | 完成性 | / | 反復性 |
| シタ | 完成性 | パーフェクト性 | 反復性 | |
| シテイル | 継続性 | 動作継続性 | / | 反復性 |
| シテイタ | | 変化結果継続 | パーフェクト性 | 反復性 |

表<2>

表<2>を踏まえて、V_Bの内項が生起していない場合、「VP+の」の意味指示とV_BのAspectとの関係述べよう。

2.3.1 V_BのAspectが<完成性>を表す場合、「VP+の」が自者指示を表す

(13)のようにV_BのAspectが<完成性>を表す場合、「VP+の」が自者指示を表す。

- (13) 母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這いになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剥いたぐるぐるの輪になった皮を食っている。(「蟹工船」青空) (<完成性> 自者指示)

(13)の下線部の「子供の食うの」は内項が生起していない。また「食う」は<完成性>を表す。「子供の食うの」は多義ではなく、「子供の食う」その事態自身を意味する。

2.3.2 V_BのAspectが<パーフェクト性>を表す場合、「VP+の」が他者指示を表す

(14)が示すようにV_BのAspectが<パーフェクト性>を表す場合、「VP+の」が他者指示を表す。

- (14) できあがったのを見ると、頼んだようにできていないので、がっかりした。(「女性徒」青空) (<パーフェクト性> 他者指示)

(14)の「できあがったの」には内項が生起していない。「できあがった」が<パーフェクト性>を表す。従って「できあがったの」は内項の「頼んだもの」を意味する。

2.3.3 V_BのAspectが<動作継続性>を表す場合、「VP+の」が自者指示をも他者指示をも表す可能性を兼ねる

(15)のようにV_BのAspectが<動作継続性>を表す場合、「VP+の」が自者指示を表すこともあり、他者指示をも表すこともある。

- (15) a. 子供が食べているのを見ると、腐った林檎だった。(内省) (<動作継続性> 他者指示)
 b. 両親がおいしそうに食べているのを見て、ちょっと親孝行が出来たかないう気がした。(内省) (<動作継続性> 自者指示)

(15a)と(15b)のV_BのAspectはいずれも<動作継続性>を表すが、(15a)が「子供が食べているモノ」を意味するのに対して、(15b)が「両親がおいしそうにたべている」その事態自身を意味する。その場合、「VP+の」の意味指示はさらに後続する文に関係するのではないかとと思われるが、ここは指摘にとどめる。

3. 終わり

本稿の考察結果は次のようにまとめられる。

(一) Vが「内的情態他動詞」や「静態動詞」や「非能格動詞」である場合、「VP+の」が自者指示を表す。Vが「外的運動他動詞」や「非対格動詞」である場合、「VP+の」の意味指示が不明で、V_Bの必須項の生起やV_BのAspectをも考察する必要があると思われる。

(二) Vが「外的運動他動詞」や「非対格動詞」である場合、「VP+の」の意味指示はV_Bの外項が生起するか否かに影響されていないのに対して、内項が生起するか否かに影響されている。Vの内項が生起する場合、「VP+の」は自者指示を表す。Vの内項が生起していない場合だけ「VP+の」が他者指示を表すことが可能になる。指示対象はVの内項と一致している。Vの内項が生起していない場合、「VP+の」が自者指示を表す可能性もあり他者指示を表す可能性もある。その場合、V_BのAspectをも考察する必要があると考えられる。

(三) Vが「外的運動他動詞」や「非対格動詞」であり、統語上内項が生起していない場合、Vが<完成性>を表せば、「VP+の」が自者指示を表す。Vが<パーフェクト性>を表せば、「VP+の」が他者指示を表す。Vが<動作継続性>を表せば、「VP+の」が自者指示をも他者指示をも表す可能性を兼ねる。その場合、「VP+の」の意味指示はさらに後続する文に関係すると思われる。

注

1. 例文は「青空文庫日本語用例検索」
 サイト <http://www.tokuteicorpus.jp/team/jpling/kwic/> からのものである。

参考文献

- 黄毅燕(2005)「日語の自指与转指初探」『日語研究』(3), 69-81
 黄毅燕(2007)「VP+的(+NP)与「VP+[の/NP]」自指与转指的对比」『解放军外国语学院学报』(1), 15-19,41
 黄毅燕(2009)「日語「VP+の」的自指转指与后续动词性质的关系」第80回中日両言語対照研習会発表論文
 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房(1993年初版 1997年初版3刷)
 工藤真由美(1995)「Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現」ひつじ書房(1995年初版 1997年初版2刷)